

外部評価委員会 評価結果報告書

平成23年6月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)

まえがき

東京都健康長寿医療センター研究所は、平成21年4月にこれまでの東京都老人総合研究所が東京都老人医療センターと一体となり、医療と研究の融合により健康長寿社会の実現を目指し、地方独立行政法人として新たにスタートいたしました。

研究所は、高齢者の医療と介護を支える研究を推進するため、自然科学系と社会科学系の2系に分かれており、自然科学系は、老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム及び神経画像研究チームの5チームで構成されています。また社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム及び福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成されています。それぞれの研究チームには特色のある研究テーマがあります。また、個別の研究チームの枠を超えて研究所が一丸となって取り組む長期プロジェクト研究も行っており、地方独立行政法人化後2年を経過した今、法人後初めての研究所外部評価委員会を設置し、外部評価委員による専門的な見地から評価をお願いしました。

委員の皆様方には、研究所の今後のために貴重なご意見やご助言を賜り、心から感謝申し上げます。

いただきましたご意見やご助言を踏まえ、自己改革の努力を一層積み上げ、今後の研究の方向性を検討し、研究を進めていく所存です。

都民の皆様、関連する研究者の皆様には、今後とも当研究所の活動にご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)
センター長 井藤英喜

外部評価委員会の実施状況

○自然科学系

平成23年3月30日（火）

午後1時30分から

○社会科学系

平成23年3月17日（木）

午後1時30分から

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会 委員名簿

自然科学系研究外部評価委員会

区 分	氏 名	所属・役職名
学識経験者	あらい へい伊 新井 平伊	順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授
	いしい なおあき 石井 直明	東海大学 医学部 専任教授
	しもかど けんたろう 下門 顕太郎	東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科血流制御内科学分野教授
都民代表	こじま まさみ 小島 正美	毎日新聞社 生活報道部 編集委員
行政関係者	なかやま まさあき 中山 政昭	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

社会科学系研究外部評価委員会

区 分	氏 名	所 属
学識経験者	おおた きくこ 太田 喜久子	慶応義塾大学 看護医療学部 部長
	おさだ ひさお 長田 久雄	桜美林大学大学院 老年学研究科 教授
	やすむら せいじ 安村 誠司	福島県立医科大学 医学部 公衆衛生学講座 教授
都民代表	ほんだ まゆみ 本田 麻由美	読売新聞 東京本社 編集局 社会保障部記者
行政関係者	なかやま まさあき 中山 政昭	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

外部評価委員会 評定総括表

【各5点満点】

「自然科学系」…丸山直記(副所長)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	5. 総合評価
4	老化機構研究チーム (遠藤 玉夫)	4.2	4.2	3.1	4	4.04
5	老化制御研究チーム (田中 雅嗣)	3.8	3.4	3.25	3.9	3.9
1	老年病研究チーム (重本 和宏)	4.8	4.4	3.8	4.6	4.44
3	老年病理学研究チーム (沢辺 元司)	4.2	4.2	3.9	3.9	4.18
2	神経画像研究チーム (石渡 喜一)	4	4.2	3.9	3.8	4.22

「社会科学系」…高橋龍太郎(副所長)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	5. 総合評価
1	社会参加と地域保健研究チーム (新開 省二)	4.33	4	3	3.66	4
1	自立促進と介護予防研究チーム (栗田 圭一)	4.33	4	3.33	4.33	4
1	福祉と生活ケア研究チーム (高橋 龍太郎(副所長))	4	4	4.66	4	4

「長期プロジェクト」

順位	プロジェクト名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	5. 総合評価
	中年からの老化予防総合的 長期研究 (新開 省二)	4.33	4.33	4	4.66	4.33

自然科学系(A系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（自然科学系）の外部評価報告について

自然科学系 外部評価委員会
委員長 下門 顕太郎

東京都健康長寿医療センター研究所・自然科学系を構成する老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム、神経画像研究チームについて、事前に提出された研究報告書と当日のプレゼンテーションを基に評価を行った。評価に当たっては各評価委員が、あらかじめ定められた評価項目及び評価視点につきコメントを付した定量的評価を行った。また委員長が全体の意見の取りまとめを行った。

① 老化機構研究チーム

加齢・老化のメカニズムに関する質の高い基礎研究を行いユニークな成果を上げている。今期の研究が始まって間もないこともあり研究発表が非常に多いとは言えないが、今後とも発展が期待される。基礎的な研究が多いので住民や行政への還元が見えにくい分野であるが、そのことを理由でこの分野を過小評価するべきではない。

② 老化制御研究チーム

健康長寿に関する遺伝子の検索など重要な研究テーマが含まれるが、多岐にわたるテーマが含まれておりチーム全体として方向性が絞り切れていない印象がある。研究の性格上他施設との共同研究が多くなっているが、より強いリーダーシップを発揮して戦略的に研究を進めることが期待される。

③ 老年病研究チーム

老年医学に関する重要なテーマ（骨粗鬆症、サルペニア、血管病など）に焦点を絞った臨床への成果還元が期待されるチームで、一部の研究はかなり進捗している。今後、臨床部門との連携を進め、基礎研究から前臨床・臨床応用研究への移行が確実に進むよう計画を進行させることが期待される。

④ 老年病理学研究チーム

テロメア長測定による高齢者がん病態の研究は臨床応用が期待できる。高齢者のバイオバンク（脳、その他の組織）は国際的にも貴重なリソースバンクであり、大切に守り育てていくべき事業である。バイオバンクが有効に利用されるように、センター内・国内外との共同研究を推進することが期待される。パーキンソン病の発症に重要な大脳基底核の生理学的解析は順調に進捗していると判断できる。

⑤ 神経画像研究チーム

画像診断という実際的な分野で新規 PET 薬剤開発など実用的な成果を上げている。画像診断による認知症の診断は病因の解明とも関係しており、この意味で認知症の基礎研究と実臨床を結ぶ要となっていると言える。競争力を保つための体制強化が望まれる。

最後に全体の総論を述べる。

世界的に見ても加齢、老化の研究体制は十分でなく、長い伝統をもつ東京都健康長寿医療センター研究所がこの分野の研究の進歩に果たす役割は大きい。すべての委員が、各研究チームとも超高齢化社会の医療に資する質の高い研究を行って一定の成果を上げていると評価した。診断治療や健康の維持など実用化が期待される研究も多いと考えられた。他方、研究のストラテジー、センター内外の研究者との共同研究の在り方、地域住民や行政への還元などについては改善の余地があると指摘する意見もあった。社会への還元については、近視眼的な成果を求めるべきでないが、成果のアピールを各研究者やチームに任せずセンター全体でさらに取り組みを強化すべきである。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化機構研究チーム

チームリーダー：遠藤玉夫

各委員の評点	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均点	4.2	4.2	3.1	4	4.04

5点×1名
4点×4名

5点×1名
4点×4名

3. 5点×1名
3点×4名

5点×1名
4点×3名
3点×1名

5点×1名
4. 2点×1名
4点×2名
3点×1名

5チーム中 4位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4.2点
<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれに興味深いデータが得られている。 ・健康長寿マーカーの探索、老化および老年の発症機構に関わるタンパク質の解析、認知症における糖鎖の遺伝子解析、老化の一因と考えられている活性酸素の中でも特に毒性が強いOH・を特異的に測定する技術の開発など、独創的で新規性があり、今後の老化研究に必要な研究を行っている。 ・一人の研究者が行っていると思われる研究は、独創性はあるものの、研究所全体、あるいは外部との連携が弱いと感じられた。 ・老化メカニズムの解明を試みこれまで成果を上げてきた 分子修飾とりわけ糖鎖による修飾に重点をおいた計画は独創的であり、本研究所ならではの研究と評価できる。 	
2. 研究成果	平均4.2点
<ul style="list-style-type: none"> ・老化機構解明なので、たんぱく質分析、酸化ストレス、活性酸素関連研究は理解できるが、アルツハイマー病の早期診断・予防までを目的とした研究を共同研究にしこの部門で行うのは適切であろうか？ ・老化研究に必要な基礎研究が盛り込まれており、目標の達成半ばではあるが、着実に成果は上がっている研究が多い。 ・「運動と活性酸素産生」の新規の結果は重要であり、社会への貢献が期待される。 ・1年間の成果としては研究量が少ないと感じさせる研究があった。 ・抗Aβ抗体の作成、アルツハイマー病の糖鎖脂質関連遺伝子の検索、老化モデルマウスでの糖鎖の延長など重要な知見を得ているが、論文として発表するには至っていない。来年度以後に期待したい。 	
3. 研究成果の還元	平均3.1点
<ul style="list-style-type: none"> ・この部門での研究を行政等への還元で要求するのは不適切であり、むしろ臨床部門へ還元することが最大の目標として設定されるべきではないか。 ・研究レベルの段階のものが多く、世の中への貢献には至っていないと考えるが、期待感はある。 ・研究所内あるいは国内の研究者レベルでの貢献は大きいですが、研究が開始されて間もないこともあり、成果が社会に還元されるのは来年度以後と考えられる。 	

4. 今後の展望と発展性

平均4点

- ・基礎部門としての役目と目標を明確に設定すべきであり、今のままでは還元の部分での評価が低くなってしまうと危惧する。本来の目的にあった基礎研究としては成果が上がってきていると思われるが、全体評価として今のままでは平均点とならざるを得ない。
- ・Aβ抗体は認知症の予防診断に重要であり、今後臨床医との連携に期待が持てる。
- ・認知症における糖鎖遺伝子発現の解析で得られた遺伝子の中から、認知症の原因となる遺伝子の特定に期待が持てる。
- ・Klothoマウスに関しては野生体で加齢によりこの異常糖鎖が実際に増加しているかを確認することで発展する可能性がある。
- ・老化および老年病の発症機構に関わるタンパク質成分の解明は時間はかかると思うが、重要な課題であり、研究所の目玉として発展性が大きい。
- ・独自に開発した活性酸素OH[•]の測定系はとてもユニークで重要なので、共同研究者と連携して、さまざまな研究で社会に貢献することに期待が持てる。
- ・本研究所の特徴を生かしたユニークな研究が進行中であり、発展が期待できる。

5. 総合評価

平均4.04点

- ・基礎部門としてよく頑張っておられるとの印象を持った。行政などへの還元を要求されるのは酷な印象も持った。
- ・このチームはさまざまな老化研究に必要な有用な評価系を持ち、研究所内のみならず外部との共同研究により、大きな成果を上げることが期待される。研究がお互いに関係しているのでチームの中での連携を望む。
- ・Klothoはマウスモデルになるかという疑問も多く出されており、この研究が老化研究に貢献できることを明確に示す必要がある。
- ・SDRマウスは野生体に比べて体重差が大きく、そこでエネルギー代謝と老化の関係を明らかにすることは困難と思われるので、研究内容、計画を密に立てることが必要と思われる。説明だけでは判断できないが、1年間の研究量としては少ないように思われる。
- ・あらたな中期目標のもとでの研究が始まったばかりで、論文発表や社会還元ができていないとは言えないが、着実に研究が進行し成果がえられている。
- ・抗Aβ抗体の作製は、認知症の治療・診断に非常に有用だと感じた。独創的というわけではないが、今後の発展性を大いに感じた。
- ・アルツハイマー病で発現が増えた糖転移酵素(GnTⅢ)と病態との関連の研究も、今後の認知症の発展に大いに寄与するのではと感じた。
- ・老化マウス(KLOTHO)を使った実験も興味深く、酸化ストレスが老化を促すという作業仮説も、非常に興味深い。酸化ストレスが老化にどう関係するか分子メカニズムの解明はかなり進んでいくのではと感じた。ただ、分子メカニズムが分かっても、実際にそれが人で実用化されるのはかなり難しいとの印象ももった。
しかし、「脳梗塞で倒れた患者で酸化ストレスの高進を食い止める方法として実用化される可能性がある」との話はとても興味深かった。

6. 評価を終えて

・行政や政策への還元までを基礎部門が要求されるような状況は望ましい状況とは思わない。もし、このような目標設定ならば、つまり還元までも常に視野に入れた研究となるならば、研究所内で部門を越えたプロジェクト研究として予算を設定したほうが望ましいのではとの印象を持った。

・遠藤玉夫先生の説明は的確で内容を良く理解できました。

人的にも経済的にも限られているのですから、共同研究体制をさらに強化して、素晴らしい成果を出されることを期待します。

・全てのグループに共通することとして、行政社会に対する還元のデータが少ない。本研究所に近視眼的な社会、行政への還元を求めるのは、極めて非文化的発想と思われるが、もしそれが求められるのであれば、成果のアピールや、マスコミで取り上げられた事例の収集・記録を組織的に行うべきである。このような作業を研究者に求めると研究効率の低下をきたすので、事務組織の一部にそのような部門を設置する必要があると思われる。

・全体としての印象＝分子機構を通じた老化の研究はかなり進んでいると感じた。発展性も大きいと思った。研究員の意欲も強いと感じた。

・ただし、こういう成果が都民に還元されているとはいいいがたい。もっと、研究者が中学や高校、大学へ出ていって、出前授業で老化研究の先端科学をわかりやすく伝えることも可能ではと思った。

・マスコミの記者たちにも、2カ月に1回、定例の会見を行い、先端研究の成果を披露することも必要だと感じた。

・出前授業とマスコミ会見は、この老化機構研究だけでなく、すべての研究にいえるので、ぜひ、やってほしい。

・新聞の記事になる材料は予想以上に多いと感じた。マスコミ会見は記者たちの「科学リテラシー」の向上にも役立つこと間違いなしだ。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化制御研究チーム

チームリーダー：田中雅嗣

各委員の評点	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均点	3.8	3.4	3.25	3.9	3.9

5点×1名

4点×3名

2点×1名

4点×3名

3点×1名

2点×1名

4点×1名

3点×3名

評価せず×1名

4. 5点×1名

4点×3名

3点×1名

4. 5点×1名

4点×3名

3点×1名

5チーム中 5位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均3.8点
<p>・それぞれに興味深い研究テーマであったが、共同研究が多く独自の研究が少ない印象や、老化制御テーマとして歩行カメラや身体活動計研究は適切かどうかなど、また総花的で部門としての統一性に欠ける印象はぬぐいきれなかった。</p> <p>・ミトコンドリアゲノム研究では独創的な研究を先駆けられており、他施設の共同研究体制もしっかりしている。</p> <p>・次世代シーケンサーによるエクソン解析はターゲットを絞れば全塩基配列決定よりも安価で有用なデータを得ることが可能となる。</p> <p>・歩行解析研究は長期間に渡る実績があり、高齢者の活動の予防・改善に必要性が高い。自律神経機能研究や認知症の予防・改善に結びつく独創的な研究である。</p> <p>・単独で行っていると思われる研究もあり、それらは研究所全体、あるいは外部との連携への貢献度は低いと思われる。</p> <p>・健康長寿に関するゲノムの探索など重要な研究テーマが含まれるが、大規模な網羅的研究を行う戦略が見えてこない。長寿、認知症、サルコペニアの原因の網羅的研究に関しても当研究所は日本をリードすることが可能な地位を占めていると思われるので、全国的なネットワークを構築し、戦略的に研究を進めるべきと思われる。このグループに高齢者の歩行解析が含まれるのは唐突に感じられる。認知症とともに研究の大きな柱となっているサルコペニア・運動機能障害とあわせて別の枠組みでの取扱が妥当ではないかと思われる。</p>	
2. 研究成果	平均3.4点
<p>・今回のご発表は、成果中心ではなく、今後の研究の展開・展望が主な発表内容になってしまっていたのが残念であった。また、一番の成果としてあげていただいたものは、名古屋大学との共同研究であった。</p> <p>・ミトコンドリアゲノムの多型研究は多方面の研究をされており、成果が出ているものが多い。</p> <p>・個々の研究レベルは高く、それぞれの分野で発表もきちんと行っているが、研究量が少ないと感じられた研究もあった。</p> <p>・個々の研究が2年目までの達成目標に届いたかどうか、報告会の説明では不明確であった。</p> <p>・今後、成果の発表が期待される。</p>	

3. 研究成果の還元	平均3. 25点
<ul style="list-style-type: none"> ・発表内容から、今までの成果が還元されているかどうかは判定できなかった。 ・多くは研究半ばのものであり、社会に還元されるに至っていない。 ・個々には意味のある社会への発信や、企業化の努力がなされているが、全体として意義が見えてこない。 	
4. 今後の展望と発展性	平均3. 9点
<ul style="list-style-type: none"> ・総花的な印象、テーマが拡大しすぎている印象があった。 ・ミトコンドリアゲノムの多型研究と次世代シーケンサーによる全エクソン解析では老化および老年性疾患に關与する遺伝子の特定に期待できる。 ・自律神経機能研究は高齢者の疾患予防に貢献できる可能性があるため、共同研究体制を作ることで、ヒトへの応用を望む。 ・トレハロースの研究は線虫のみならずマウスにおいても、トレハロースそのものによる効果か、あるいは代謝産物であるか、また高等動物における役割が解明できれば期待できる研究である。 ・水素水はユニークな研究で将来性を感じさせる。 ・複数の性格の異なる研究が含まれており、個々の研究テーマに関して大きなブレイクスルーが得られる可能性がある。 	
5. 総合評価	平均3. 9点
<ul style="list-style-type: none"> ・部門の研究としては、老化制御や自律神経系研究の方が適切な印象を持った。逆に言えば、長寿ゲノムや代謝産物研究は他の施設との共同研究に負うところが多い印象あり。よりoriginalな研究が望ましいのではないか。 ・歩行解析グループは長年に渡る実績があり、センサーを使った行動解析など新しい試みを積極的に取り入れる努力をしている。高齢者の歩行解析研究は他の研究機関でも盛んにおこなわれているので、連携することも重要と考える。 ・ゲノム解析グループも多方面に研究を広げ、また多くの内外の共同研究者との連携を積極的に行っている姿勢が感じられた。 ・自律神経グループも着々と成果を上げていると感じられた。 水素水はユニークな研究で将来性も感じさせるが、老化の研究として臨床応用よりも先に、水素水が老化・寿命に効果があるかを高等動物で実証する必要がある。 ・①トレハロースの研究は独創性があるものの、評価委員会で発表されたものはすでに論文になった内容も多く(前年度の成果も多く含まれている)、今年度に行われた研究量は研究員が2名で担当しているにも関わらず、教育にも時間を取られている大学の研究者でさえ1名で行うほどにしかならないのではないかと。研究所で行う研究にしては効率の悪さを感じさせた。また今後マウス研究者との連携が必須と考える。 	

5. 総合評価【続き】

- ・②CoQによる老化制御のメカニズムの研究は、マウスの飼育に時間を取られることを考慮しても実験量の少なさが感じられる。
- ・①と②の研究に関して、現在の研究速度では事業計画期間内の目標達成は困難と思われる。
- ・種々雑多なテーマが含まれ、研究グループの全体像が見えにくい。網羅的研究については、他グループの研究も含め総合的な戦略の構築が望まれる。
- ・超長寿者たちの遺伝子やミトコンドリアの機能を調べることで、長寿の秘密をさぐる研究はとてもおもしろい。そうした遺伝子の研究が、骨粗しょう症や希少疾患の解明にもつながるとなると、今後の発展にとっても夢を感じる。
- ・ごくありふれた物質のトレハロースが線虫の寿命をのばし、老化にかかわっている実験は非常におもしろい。今後、マウスの寿命が延びるか期待される。マウスの実験ながら、ビタミンC欠乏で肺気腫を発症する実験は、人のCOPDの発症予防に結びつくだけに、大きな期待を抱かせた。認知機能障害の緩和に水素水が有効かもしれないというマウスの実験も興味深い。将来、臨床的な応用に結びつくような感じをもった。
- ・βAによって、遺伝子の発現がどう変化するかという研究にも期待がもてる。骨髄から取り出した間葉系幹細胞を脳内に注入して、認知機能の低下防止を目指す研究もすばらしい。
- ・ピルビン酸療法は、国の希少疾患事業の対象になる要素をもっている。もっとPRしてもよいのでは。
- ・皮膚刺激などが脳の血流を促し、認知症の改善に貢献するかもしれないという研究もおもしろい。「歩く」「皮膚をマッサージする」といった単純な行為が科学的なメカニズムの解明で認知症によいと分かれば、自治体の認知症防止プログラムにも大いに貢献する可能性が強い。
- ・群馬県中之条町での1500人の高齢者の遺伝子解析と健康、運動能力の関係解明は、全国の高齢者の健康づくりの参考になる有用性を秘める。

6. 評価を終えて

- ・研究所内での共同研究をより発展させていただくことが肝要ではないかと思われた。
 - ・研究の量が研究者により大きな差があったのが気になりました。効率的な研究を行い、計画通りに目標を達成するには体制の再構築、研究の集約も必要と考えます。
 - ・全体の印象＝どの研究が独創的かは分からないが、どの研究にも実用的な有用性を秘めた発展性を感じた。こういう話は都民を対象にした市民講座でもっと紹介してほしい。
- 「老人研NEWS」で、こうした研究の一端がわかりやすく紹介されていて、とてもよいことだと思うが、その中で「この研究の新しい点は〇〇」「成果は〇〇」「今後の発展性は〇〇くらいです」といった自己評価を記すべきだ。難しいテーマでも、自己採点があれば、読む側も評価しやすいし、伝える側の意欲も変わるはずだ。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病研究チーム

チームリーダー：重本和宏

各委員の評点	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均点	4.8	4.4	3.8	4.6	4.44

5点×4名
4点×1名

5点×2名
4点×3名

4点×4名
3点×1名

5点×3名
4点×2名

5点×2名
4. 2点×1名
4点×2名

5チーム中 1位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4.8点
<ul style="list-style-type: none"> ・3テーマともoriginalな研究で興味深かった。 ・内外との共同研究体制が確立されている。 ・研究目標が明確である。 ・世界に先駆けた実験システムの開発を行い、独創性、新規性、必要性に富んだ研究を行っている。 ・サルコペニア、骨粗鬆症、血管病などに関して、臨床分野と連携して、チャレンジングな研究計画である。心筋再生に関しては、ヒト材料を用いた臨床応用が始まっている現時点で、膨大な費用が必要とされる大動物モデルを用いた研究の必要性は再考する必要があるかもしれない。大動物モデルを用いて解決すべき問題点を明らかにすると同時に、人型遺伝子改変動物を確立し、ヒト以外の動物に由来する材料を用いた再生医学なども視野に置いてはどうか？ 	
2. 研究成果	平均4.4点
<ul style="list-style-type: none"> ・部門としての研究テーマをきちんと絞って、明確な方針の基に得られたすばらしい成果と思われる。 ・血管医学研究チームは成果はあがっていないものの、目標達成可能と感じる準備を着実に進めている。 ・生活習慣病研究チームはすでに臨床応用の段階まで達している。 ・運動器医学研究チームは筋繊維タイプを可視化するという快挙をなしとげ、目標達成を成し遂げている。 ・サルコペニアや骨破壊に関するユニークな視点での研究がおこなわれ成果が得られている。 	
3. 研究成果の還元	平均3.8点
<ul style="list-style-type: none"> ・臨床への、ひいては行政への還元も期待できる。 ・骨粗鬆症の遺伝子多型においてはすでに第2コホートに進んでおり、社会への貢献が期待される。 ・すべての研究チームの研究は社会貢献に結び付く可能性が高く、大きな成果が期待できる。 ・研究所は美術館・博物館同様、文化都市が所有していることを誇るべき文化財であり、行政、産業への還元を期待すべきでないと思えるが、もしそうであれば、マスコミで取り上げられた事例や審議会などへの参画の有無を報告書に記載すべきと思われる。 	

4. 今後の展望と発展性

平均4.6点

- ・今後に期待しています。
- ・細胞移植医療に関しては臨床的な応用が期待できる。
- ・MusColorマウスは多方面で大きな成果が期待できる。
- ・運動器医学研究に関しては前臨床・臨床応用研究への移行が期待できる。
- ・高齢者の転倒、骨折、寝たきり、代謝異常などに関係するサルコペニアに関する研究では特に成果が期待される。

5. 総合評価

平均4.44点

- ・部門として当然のことであろうが、臨床に根ざした臨床研究が高く評価できよう。
- ・現時点では目標通りの研究成果が得られている。
- ・MusColorマウスは多方面で大きな成果が期待できるので、内外の共同研究の連携を強化することを望む。
- ・運動器医学研究に関しては前臨床・臨床応用研究の内容が不明確なので、基礎からの移行が確実に進むように今後の詳細な研究計画の議論が必要。
- ・臨床応用できる研究が多く期待されながらも、基礎から前臨床研究・臨床応用研究に目標期間内に達成することは容易ではないと考える。そのためには詳細な研究計画を練る必要がある。
- ・焦点が絞られたユニークな研究を展開して、成果を上げている。現在得られている、あるいは近い将来得られる成果が、高齢者の疾患の治療や生活の質を上げることに直結している。
- ・幹細胞を利用した再生医療は注目度が高い。幹細胞の培養、移植は概念としての有用性はわかったが、いまどこまで進んでいて、将来、どんなふうの実用化されるかの見通しの説明がもっとほしい。この点をもっと明確にして、情報を発信したらどうだろうか。
- ・骨粗しょう症に関連する遺伝子多型を同定した話は、サルコペニアの診断、治療に結びつく可能性を秘め、大きな独創性を感じた。サルコペニアの発症には多数の因子が関与しているが、筋と運動神経細胞の相互作用の異常が筋委縮をもたらしているのではという発想は将来性を秘めていて、ロマンを感じる。ミトコンドリアゲノムの多型と動脈硬化症の関係を解明する研究も、おもしろい。
- ・大動脈の老化研究は、何が独創的なのかよくわからなかった。加齢にともない、動脈が老化するのは当然のことなので、研究のどこが新しく、その解明がどう治療に結びつくかの情報発信をもっとしてほしい。

6. 評価を終えて

- ・できるならば、研究所内の基礎部門との共同研究も展開できると望ましいと思われた。
- ・研究体制がしっかりしていて成果に期待が持てます。
- ・全体の印象＝全般的に研究が独創的だと感じたが、私のような素人には、老年病理学研究との境界がよく分からない。『老年病研究』と『老年病理学研究』の境をもっと明確にしてほしいと思った。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病理学研究チーム

チームリーダー：沢辺元司

各委員の評点	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均点	4.2	4.2	3.9	3.9	4.18
	5点×1名 4点×4名	5点×1名 4点×4名	5点×1名 4点×2名 3. 5点×1名 3点×1名	5点×1名 4点×2名 3. 5点×1名 3点×1名	5点×1名 4点×3名 3. 9点×1名

5チーム中 3位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4. 2点
<ul style="list-style-type: none"> ・全国的にみてもユニークなバンク組織。しかも、高齢者の特化しており、重要なものであると判断する。 ・高齢者のブレインバンク・病理解剖バイオバンクはこの研究所ならではの貴重なバンクになると考えられる。 ・他施設との連携も深めている。 ・基礎との連携が不明確。 ・高齢者の癌に関する研究やリソースバンク事業など、本研究所ならではの研究・事業が行われている。 	
2. 研究成果	平均4. 2点
<ul style="list-style-type: none"> ・originality が高い。 ・バンクのための業務は順調にスタートしており今年度の目標は達成したものとする。 ・グループによっては論文による業績を着実に出してきている。 ・ゲノムの多型が表現形にどのように反映されていくのかという今後の研究戦略の議論がほとんどされていないように感じた。 ・高齢者の癌に関しては、当該研究の結果により米国消化器病学会の疾病の定義が変更されるなど、インパクトのある研究成果が得られている。ブレインバンク事業でも、国際的な枠組みで共同研究が進行し、有益な貢献をしている。 	
3. 研究成果の還元	平均3. 9点
<ul style="list-style-type: none"> ・今後、わが国の多くの施設との共同研究も期待できる。 ・高齢者のバイオバンクを充実させることで社会・医療への貢献度は大きなものになり、行政への影響も大きいと考える。 ・成果の行政、社会へのアピールが組織的に行われていない。 	

4. 今後の展望と発展性

平均3.9点

- ・我が国において剖検率が低下している中で、このような組織を継続して運営していこうとする試みは高く評価できるし、今後に期待が持てる。
- ・バイオバンクは研究所のみならず日本にとっても重要な資産になる。
- ・神経病理生理研究グループの研究は臨床研究への応用が期待できる。
- ・高齢者の癌に関する研究や、ブレインバンク事業は、老化や老化にともなう疾病発生のメカニズムの解明にも、また実際の疾病の予防治療にも直結する重要なテーマで、現在の進行状況から考え、大きな発展が見込める。

5. 総合評価

平均4.18点

- ・originalityを有する組織をもち、独自の路線を走っていることが高く評価できよう。
- ・バイオバンクは研究所の重要な資産になるが、収集量で価値が決まるところがあるので、今後、収集システムの強化し、充実したバンクにすることを望む。
- ・神経病理生理研究グループの研究をどのように臨床研究に応用していくのかの議論を望む。
- ・神経病理生理研究グループは多くの研究員が関わっているが、研究量から考えると、効率良い研究体制になっているか議論の余地がある。
- ・種々の疾患におけるエストロゲンの関与は大きな研究の連携の中でどのような役割をするのかを明確にして欲しかった。また、基礎研究の充実が必要。
- ・高齢者の癌に関する研究や、ブレインバンク事業など本研究所の存在意義に係る研究を担っており、成果を上げている。
- ・老化とがんの発症でテロメアの長さが関係している話は興味深い。ただ、高齢者にがんが多いのは当たり前前にも思えるので、それを解明したからといって、治療とどのように結びつくかが分からない。将来の展望をもっと語ってほしかった。エストロゲンの遺伝子多型とがんの関係もおもしろいが、将来の診断にどの程度の確度で寄与できるかがよく理解できなかった。
- ・ブレインバンクネットワークは、登録者の同意・理解が欠かせないと思うが、これが充実させると一般都民にどういうメリットが出てくるかがいまひとつ理解できなかった。
- ・地道に研究するだけでも成果が上がるものと、一般の人の協力を得て研究するものとは、情報発信のスタンスが異なるはずなので、このブレインバンクはもっとマスコミを通じて、都民に知らせる価値があるのではないか。同僚の記者に聞いても、だれもブレインバンクネットワークのことを知らなかった。

6. 評価を終えて

- ・今後の脳研究の重要な位置を占めると思われるヒト組織バンクは大切にすべきであり、今後のわが国の脳研究に大いに役立つものと思われる。
- ・バイオバンクの話と研究の話が混在した発表だったので、整理して話して欲しかったです。
- ・バイオバンクを作る難しさは十分理解していますので、ぜひ頑張ってください。
- ・全体の印象＝テロメアの研究は学術的にみて期待が大きい感じがした。細胞をみて、テロメアから、がんの発症の程度を予測できるようになるのだろうか？。研究者が将来の見通しをもっと語ってほしい。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●神経画像研究チーム

チームリーダー：石渡喜一

各委員の評点	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均点	4	4.2	3.9	3.8	4.22
	5点×1名 4点×3名 3点×1名	5点×1名 4点×4名	5点×1名 4点×2名 3. 5点×1名 3点×1名	5点×1名 4点×2名 3点×2名	5点×2名 4. 1点×1名 4点×1名 3点×1名

5チーム中 3位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> ・高い研究意欲・志向が感じられた。 ・痴呆症の早期診断に必要な技術である。 ・新規PET薬剤開発に着手している。 ・チームとして連携が取れている。 ・認知症の早期診断に必要な重要な研究テーマである。基礎から臨床まで幅広い分野の共同研究の要となっている側面があり評価できる。 	
2. 研究成果	平均4.2点
<ul style="list-style-type: none"> ・独自の研究を展開しつつある。 ・新規PET薬剤開発では臨床使用開始まで到達しており、成果が出ている。 ・成果発表が豊富だが、どこに的を絞ってやっているのかが不明確。 ・長期に経過観察し解剖にまで至る症例の画像解析など、他の施設の追従を許さない研究成果を上げている。 	
3. 研究成果の還元	平均3.9点
<ul style="list-style-type: none"> ・部門の特性ではあるが、臨床への還元が十分に期待できる。 ・医療に貢献している。 ・臨床試験にまで発展した診断薬を開発するなど、実際の臨床や産業等への還元が明確である。 	

4. 今後の展望と発展性

平均3.8点

- ・臨床に用いることができるほどの信頼性・妥当性を有する検査法の確立が望まれている。
- ・継続することによりさらに技術向上がなされ社会・医療に貢献が期待できる。
- ・画像所見と病因、病態との関連の解析は、世界的にも大きな発展が期待される分野であり、さらなる拡充が望まれる。

5. 総合評価

平均4.22点

- ・頑張っておられるとの印象を受けた。
- ・人数が少ない割には大きな成果が上がっていると思う。
- ・画像診断は日進月歩であり、多数の機関で研究がなされているので、独自性があるものに的を絞った方が大きな成果が得られるのでは。
- ・研究所の売りの一つにするのであれば、他施設に負けないために体制の強化を望む。
- ・認知症の診断や脳機能の解析における画像解析の重要性は増しており、着実な成果を上げている。
- ・実用化がもっとも期待される分野なので、興味深く聞いた。アミロイドPETはかなり進んでいる印象を受けた。ただ、これは他の研究機関でも研究を進めており、都が独創性や成果の点でどこまでリードしているかがよくわからなかった。もっと成果を発信してほしい。
- ・研究をさらに発展させるにあたって、何が足りないのか、資金なのか、研究者の数なのか、研究に協力してくれる高齢者なのか、そのあたりを知りたい。早期診断はよいが、それが間違っって診断された場合のマイナス面など社会的な問題はないのだろうか。
- ・がん診断薬は、将来性があるような気がしたので、もっと説明してもらう時間がほしかった。

6. 評価を終えて

- ・この画像検査部門の特徴として研究テーマが明確なので、日進月歩の研究成果を上げてほしいと期待する。
- ・この人数でこれだけの成果を上げているのは立派です。もっと的を絞ったらさらに大きな成果が上がるのではと感じました。
- ・全体の印象＝将来性は高いと感じた。期待も大きくふくらんだ。ただ、実用化に向けての課題をもっと語る必要がある気がした。

社会科学系(B系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（社会科学系）の外部評価報告について

社会科学系 外部評価委員会

委員長 長田 久雄

東京都健康長寿医療センター研究所は、平成21年度に地方独立行政法人として新たなスタートを切った。研究所は自然科学系と社会科学系の2系に分かれており、本委員会は社会科学系及び長期プロジェクトについて評価を行った。

社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム、福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成され、それぞれに新たな研究を進めている。また、長期プロジェクトは、東京都老人総合研究所時代から行っている長期プロジェクト研究であり、今年度で20年目の節目を迎え、一区切りを付けるところである。

各研究チーム、プロジェクトから事前に提出された研究報告書と実際に行われたプレゼンテーションを基に、研究所が定めた評価項目及び評価視点を基に行った評価を、委員会としてとりまとめたので、ここに報告する。

各委員の評価について、チーム、プロジェクト毎に以下のようにまとめる。

①社会参加と地域保健研究チーム

研究課題が多様であるが、それぞれが計画的に進められており、研究成果も上がってきている。社会や行政への提言など、具体的な研究成果の還元やテーマ毎の関連性、統合性を強化するため、チーム全体としての枠組みを明示し、テーマ毎の位置付けを明確にすることで、各テーマの意義や相互の関連性、補完性が明らかになることが期待される。

②自立促進と介護予防研究チーム

研究計画は妥当であり、研究成果も上がってきている。他機関では実施困難な大規模な継続介入が出来る組織的な強みがあり、計画、方法、テーマとも優れていると評価できる。学会、学術雑誌への発表は積極的に行われている。社会や行政への提言など、具体的な研究成果の還元に努力してほしい。

③福祉と生活ケア研究チーム

臨床研究を積み重ね、そこにある課題を明確にしており、目的に合わせた量的な研究方法と質的な研究方法を効果的に取り入れている。貴重な知見が得られており、研究成果も上がってきている。行政や地域への還元も十分に行われている。

④長期プロジェクト

他にない研究であり、素晴らしい実績、成果が上がってきている。20年間の研究蓄積により貴重かつ確実な知見が得られている。費用対効果は結果と、その社会的還元の如何にかかっているが、可能であれば何らかの形での研究継続を期待する。

社会科学系全体の総論を述べる。

チーム内の相互の関連性、連携の方針、重複の整理などがやや不十分な印象を受けた。社会科学系全体としての包括的視点から、枠組み、展望、研究の位置付けを明示し、全体としての目標と各チーム、テーマの研究とを関連づけて示していくことが必要だろう。TMIG-LISAのような他の大学や研究機関が実施しにくい研究所ならではの特性を活かした研究を今後も意識して進めてもらいたい。以前の老人総合研究所時代から対外的な情報発信の弱さが指摘されていた。実証的な研究の結果はピア・レビューを経た学術論文として発表し、その後可能な限り速やかに社会に向けて成果を還元すべきである。そのためには、他機関との連携をより推進し、研究を人的にも補完することが重要であろう。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●社会参加と地域保健研究チーム

チームリーダー：新開省二

委員	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均	4.33	4	3	3.66	4
	5点×1名 4点×2名	5点×1名 4点×1名 3点×1名	4点×1名 3点×1名 2点×1名	4点×2名 3点×1名	5点×1名 4点×1名 3点×1名

3チーム中 1位

評定の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4.33点
<ul style="list-style-type: none"> ・評価の視点もち、計画性をもって研究が遂行されている。社会的必要性が高い研究が実施されている。 ・本研究チームは、主として典型的な高齢者、恵まれた高齢者を対象として、社会参加・社会貢献と老化・虚弱の一次予防を中心とした研究を行っている。現状と課題の分析、要因の解明、尺度開発、プログラムの開発と提示を学際的、縦断的に行っており、企業等との共同研究も行われ、介入研究も計画されており、研究内容の独創性、必要性は高いと考えられる。それぞれの研究計画は妥当であり、研究内容にも独自性があるが、チーム全体として考えると、研究内容が多様で、各テーマの関連性や統合性が必ずしも十分といえない。本研究チームとして、社会参加と地域保健を包括する枠組みを明示し、各テーマの位置づけを明確にすると、各研究テーマの意義や相互の関連性、補完性も明らかになると考えられる。 ・高齢者の社会参加、社会貢献というテーマ設定は時宜にかなったものであり、また価値のあるものと考えます。体系的にも整理されており、研究成果が期待されます。 	
2. 研究成果	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> ・学会発表、誌上発表は熱心にされている。 ・研究成果は着実にあがっており、学術的にも実践的にも有意義な知見が得られている。学術的発表も活発に行われており、社会参加・社会貢献のテーマでは、現状と課題の分析、プログラムの開発、活用、普及、社会的孤立の実態解明と予防策の提案、老化・虚弱の一次予防のテーマでは、虚弱の指標開発、疫学的特徴の解明、バイオマーカーの検証、予測因子の同定などに基づく生活モデル型虚弱予防プログラムが作成され、今後の介入研究の基礎となる成果もあがっている。 ・説明を聞く限りでは「研究継続中」とのコメント多し。途中経過でも良いので具体的な成果をみせられないものか。 	
3. 研究成果の還元	平均3点
<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果は施策に活用される場所もあると思うが、具体的な行政への提言や施策への適用状況の報告や、審議会への参画状況の報告がなかったため、今回の資料からは不明である。 ・多様な研究テーマがそれぞれに学術的成果をあげているが、行政、地域、産業等に対する貢献は、学術的成果に比べると今後に期待される余地も大きいと考えられる。現在は中期計画の途中段階であるが、学術的に有意義な研究成果が得られているので、平成24年度までに、その段階で確認された成果に関しては行政、地域、産業等に還元することに一層の努力が期待される。行政、地域、産業等への研究成果の還元の方法も検討し工夫することが必要であろう。基礎研究とその学術的妥当性、信頼性の確認は疎かにすべきではないが、その成果の社会的還元には、正確さと同時に早さも求められるであろう。 ・研究成果の具体的なもの(行政施策への反映)がない。特に大都市東京への施策への提言等がないのは残念。 	

●社会参加と地域保健研究チーム

4. 今後の展望と発展性	平均3.66点
<ul style="list-style-type: none"> ・縦断的研究など、継続の必要性が高い研究が多いと思われる。 ・中期目標に沿って、その達成に向けた方向性が維持されており、必要性、妥当性、発展性も認められる。上述したが、本チームにおけるそれぞれのテーマの関連性や統合性が明示されることにより、より有機的で効果的な研究が展開できる余地があると考えられる。 ・大都市東京への施策への提言等に留意した研究の継続を希望 	
5. 総合評価	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> ・社会的必要性のある介入研究や縦断的研究などへの取り組みがなされ、その成果が得られている。具体的に社会や政策への提言、貢献につながるようにしてほしい。 ・多角的で方法的にも妥当な独創的な研究が、学際的に、病院や企業等との連携も取りつつ行われており、着実に有意義な研究成果が上がっている。本チーム全体としての展望や統合、及び一層の社会的還元は今後の課題であろうが、優れた研究活動が行われていると評価し得る。 	
6. 評価を終えて	
<ul style="list-style-type: none"> ・研究課題が多様であるため、それによる負担が多いのではないかと危惧される。重要課題を精選し、よい研究を積み上げていくのがよいのではないかとと思われる。 ・全てのチームに関する感想と要望をここに述べる。テーマが多角的で良いが、様々なテーマについて、各チーム、そして社会科学系として統合された視点からの枠組み、展望、各研究の位置づけなどの明確化が必要ではなからうか。限られた時間での報告会であったためと思われるが、研究チーム内の相互の関連性、連携の方針、重複の整理などがやや不十分な印象を受けた。今後は、社会科学系としての各チーム、さらに各テーマの鳥瞰的枠組みが明示され、全体としての目的と各チーム、各テーマの研究との関連と統合が必要ではないであろうか。また、全ての研究チームに共通する要望であるが、他の大学や研究機関などでは実施しにくい、本センターならではの特性を活かした研究を、今後も一層意識して進めて頂きたい。たとえば、TMIG-LISAなどが好例であろうが、その独自性と意義を成果と共に社会的にアピールすることも望まれる。研究成果の公表に関しては、先ず、ピア・レビューを受けた学術論文として発表し、学術的に確証された結果を、都民はじめ一般向けに分かりやすく有用な形で提供するという流れが期待される。これは既に本センターで実行されていることが報告会の内容からも明らかではあるが、実証的研究を終了した後に、結果を学術論文として発表し、さらに社会に向けて提供するまでの過程を可能な限り速やかに行う必要がある。そのためには、これも本センターで既に実施していることではあるが、外部の研究者と一層積極的に連携し、本センターの専任研究者だけでは不十分な側面を補うことが求められよう。とくに、現有人員では過剰な負担となったり時間を要することが見込まれる場合には、外部機関との連携は不可欠ではなからうか。また、社会的還元の新しい方法や内容の工夫、開発も今後、検討の余地があることと考えられる。 ・社会科学系全体として それぞれに重要なテーマであり、意義のあるものと考えているが、社会科学系全体として対外的な情報発信の弱さが目につく。これは以前の老人総合研究所時代から指摘されていたことである。途中経過でも良いので研究成果を都民にわかりやすく示してもらいたい。独法化した今この弱点を是非克服してほしい。 	

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●自立促進と介護予防研究チーム

チームリーダー：栗田圭一

委員	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均	4.33	4	3.33	4.33	4

5点×1名
4点×2名

5点×1名
4点×1名
3点×1名

4点×1名
3点×2名

5点×1名
4点×2名

4点×3名

3チーム中 1位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4. 33点
<p>・要介護者発生の危険因子の解明、認知症の検査ツール開発など重要性、新規性の高い課題が取り上げられている。</p> <p>・本研究チームは、筋骨格系の老化予防の促進、介護予防の促進、認知症・うつ予防と介入の促進がテーマであるが、これらはいずれも高齢社会において重要性が高い。RCTおよび介入を含む縦断研究、病院と連携した研究、企業から受託された研究がおこなわれており、研究計画は適切、妥当である。</p>	
2. 研究成果	平均4点
<p>・積極的に成果発表されている。</p> <p>・研究成果に関しては、学会、学術雑誌への発表も行われており、介入や追跡を継続中の研究もあるが、中期目標の中間時点として学術的成果が上がっていると評価しえる。</p> <p>・説明を聞く限りでは「研究継続中」とのコメント多し。途中経過でも良いので具体的な成果をみせられないものか。</p>	
3. 研究成果の還元	平均3. 33点
<p>・一部記述されているが、全体として、具体的に成果がどう使われたのか、審議会への参画など見えにくい。</p> <p>・実践的に適用可能な研究成果を有効に社会的に還元するためには、確実な学術的成果の確立が不可欠である。認知機能検査ツールの確立や認知症のための医療サービス提供状況評価尺度は検証を経ての普及が期待される。認知症疾患医療センター運営事業の条件整備に関する研究も社会的な意義があろう。</p> <p>・研究成果の具体的なもの(行政施策への反映)がない。特に大都市東京への施策への提言等がないのは残念。</p>	

●自立促進と介護予防研究チーム

4. 今後の展望と発展性	平均4. 33点
<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれ研究の必要性と方向性をもっている。 ・サルコペニア改善、膝痛改善、尿失禁改善、運動器障害における要介護者発生低減、認知症とうつ、自殺の予防と効果的介入等、本研究チームの中間目標最終段階における研究成果はいずれも重要であり、研究の必要性は高い。中期目標の最終段階では、本チーム全体としての目標である、介護予防と自立促進への本チームとしての多面的かつ統合的アプローチが確立することが期待される。 ・大都市東京への施策への提言等に留意した研究の継続を希望 	
5. 総合評価	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> ・自立促進と介護予防というグループテーマに、老化研究、介護予防研究、認知症研究があり多様である。他の機関では実施困難な大規模で継続的な介入研究が施行できる組織的な強みがある。 ・介護予防と自立支援は極めて重要なテーマであり、研究計画、研究方法、研究テーマともに優れていると評価し得る。現時点が中期目標の中間段階であるため、必ずしも完全な研究成果、介入プログラム、評価尺度が得られているとはいえない点があるが、今後の研究継続により有意義な結果が得られることが期待できる。学術的成果の確証とそれに基づく社会的還元を、可能な成果から早急に積極的に進めることも望まれる。 ・大都市東京への施策への提言等に留意した研究の継続を希望 	
6. 評価を終えて	
<ul style="list-style-type: none"> ・類似したテーマが複数のグループで重なっているところがある。多様な研究課題の骨子の報告会であるため、具体的な内容がわかりにくく、評価するのは難しいところである。研究課題間の関係、連携はどのようになっているのか。中期目標の意味がわからなかったため、正しくとらえられていないところがあると思われる。 ・全てのチームに関する感想と要望をここに述べる。テーマが多角的で良いが、様々なテーマについて、各チーム、そして社会科学系として統合された視点からの枠組み、展望、各研究の位置づけなどの明確化が必要ではなかろうか。限られた時間での報告会であったためと思われるが、研究チーム内の相互の関連性、連携の方針、重複の整理などがやや不十分な印象を受けた。今後は、社会科学系としての各チーム、さらに各テーマの鳥瞰的枠組みが明示され、全体としての目的と各チーム、各テーマの研究との関連と統合が必要ではないであろうか。また、全ての研究チームに共通する要望であるが、他の大学や研究機関などでは実施しにくい、本センターならではの特性を活かした研究を、今後も一層意識して進めて頂きたい。たとえば、TMIG-LISAなどが好例であろうが、その独自性と意義を成果と共に社会的にアピールすることも望まれる。研究成果の公表に関しては、先ず、ピア・レビューを受けた学術論文として発表し、学術的に確証された結果を、都民はじめ一般向けに分かりやすく有用な形で提供するという流れが期待される。これは既に本センターで実行されていることが報告会の内容からも明らかではあるが、実証的研究を終了した後に、結果を学術論文として発表し、さらに社会に向けて提供するまでの過程を可能な限り速やかに行う必要がある。そのためには、これも本センターで既に実施していることではあるが、外部の研究者と一層積極的に連携し、本センターの専任研究者だけでは不十分な側面を補うことが求められよう。とくに、現有人員では過剰な負担となったり時間を要すことが見込まれる場合には、外部機関との連携は不可欠ではなかろうか。また、社会的還元の新しい方法や内容の工夫、開発も今後、検討の余地があることと考えられる。 ・社会科学系全体として それぞれに重要なテーマであり、意義のあるものと考えているが、社会科学系全体として対外的な情報発信の弱さが目につく。これは以前の老人総合研究所時代から指摘されていたことである。途中経過でも良いので研究成果を都民にわかりやすく示してもらいたい。独法化した今この弱点を是非克服してほしい。 	

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●福祉と生活ケア研究チーム

チームリーダー：高橋龍太郎(事務取扱)

委員	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均	4	4	4.66	4	4

4点×3名

4点×3名

5点×2名
4点×1名

4点×3名

4点×3名

3チーム中 1位

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> 生活に密着した、重要性の高いテーマに取り組んでいる。 本研究チームでは、在宅療養支援方法の開発と要介護化要因解明と予測、終末期ケアのあり方の3つの研究をテーマとしている。主として横断法による研究および実態解明の研究であるが、在宅療養困難事例、虐待、要介護化に関わる社会的要因、施設における看取りケアという重要なテーマに関して研究されており研究の必要性は高いと考えられる。 	
2. 研究成果	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> 熱心に公表されている。英文誌への投稿が増すとよい。 在宅療養困難には、軽度、独居、症状不安定といった要因が関与していること、健康度自己評価に所得、学歴、住宅という階層や近隣からのサポートが関係していること、在宅継続のリスクとしてアンメットニーズが、促進要因としてデイケア・サービスが関連していること、虐待に気張らしの相手が緩衝要因となり得ること、施設での看取りケア体制として看取りに前向きに取り組む姿勢をもっていること、説明責任を重視していることが重要な要因であるなど、貴重な知見が得られており、研究の継続中であるが、目標の達成に向かって進んでいると評価できる。 	
3. 研究成果の還元	平均4.66点
<ul style="list-style-type: none"> 全国的な虐待対応研修への活用などがなされている。 市民からの虐待通報のためのチェックリストが作成され、通報があった際の市町村の対応がフローチャート化されたこと、東京都からの委託事業として、地域包括支援センター専門職等を対象とした家族介護者による高齢者虐待への対応方法の研修プログラムの開発されたこと、高齢者虐待対応ソーシャルワークモデルの作成などを行い、とくに虐待に関しては行政や地域への還元を積極的に行っていると評価しえる。 	
4. 今後の展望と発展性	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> 今後への重要な課題を明確にしている。 在宅療養困難要因の解明、虐待の防止、高齢者施設における看取りケアは重要な課題であり、さらに基礎的研究を進め、その成果を社会的に還元することが求められる。中期目標の達成に向けて研究を継続、発展させることが望まれる。 	

5. 総合評価

平均4点

- ・臨床研究を積み重ね、そこにある課題を見出している。目的に合わせて量的な研究方法と質的な研究方法を効果的に取り入れている。
- ・本チームの研究テーマは、在宅療養の継続、虐待の防止、利用者が望む場合の施設での看取りケアの受け入れなど、社会的重要性、有用性、意義は高いと考えられる。現在の横断的研究、実態研究を進展させ、中期計画期間中に、効果的介入、対応モデルの確立が期待される。
- ・重要なテーマ設定であり、研究の中身も充実している。

6. 評価を終えて

- ・実践的で興味深い内容であった。チーム間の共通テーマによる成果の活用や協働が推進されるとよいのではないかと。
- ・全てのチームに関する感想と要望をここに述べる。テーマが多角的で良いが、様々なテーマについて、各チーム、そして社会科学系として統合された視点からの枠組み、展望、各研究の位置づけなどの明確化が必要ではなかろうか。限られた時間での報告会であったためと思われるが、研究チーム内の相互の関連性、連携の方針、重複の整理などがやや不十分な印象を受けた。今後は、社会科学系としての各チーム、さらに各テーマの鳥瞰的枠組みが明示され、全体としての目的と各チーム、各テーマの研究との関連と統合が必要ではないであろうか。また、全ての研究チームに共通する要望であるが、他の大学や研究機関などでは実施しにくい、本センターならではの特性を活かした研究を、今後も一層意識して進めて頂きたい。たとえば、TMIG-LISAなどが好例であろうが、その独自性と意義を成果と共に社会的にアピールすることも望まれる。研究成果の公表に関しては、先ず、ピア・レビューを受けた学術論文として発表し、学術的に確証された結果を、都民はじめ一般向けに分かりやすく有用な形で提供するという流れが期待される。これは既に本センターで実行されていることが報告会の内容からも明らかではあるが、実証的研究を終了した後に、結果を学術論文として発表し、さらに社会に向けて提供するまでの過程を可能な限り速やかに行う必要がある。そのためには、これも本センターで既に実施していることではあるが、外部の研究者と一層積極的に連携し、本センターの専任研究者だけでは不十分な側面を補うことが求められよう。とくに、現有人員では過剰な負担となったり時間を要すことが見込まれる場合には、外部機関との連携は不可欠ではなかろうか。また、社会的還元の新しい方法や内容の工夫、開発も今後、検討の余地があることと考えられる。
- ・「特養のみとり」については質問でも触れたが、特養という施設のあり様に是非踏み込んだものとしてほしい。
- ・社会科学系全体として
それぞれに重要なテーマであり、意義のあるものと考えるが、社会科学系全体として対外的な情報発信の弱さが目につく。これは以前の老人総合研究所時代から指摘されていたことである。途中経過でも良いので研究成果を都民にわかりやすく示してもらいたい。独法化した今この弱点を是非克服してほしい。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●長期プロジェクト「中年からの老化予防総合的長期追跡研究」リーダー：新開省二

委員	1. 研究計画の創造性・妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果の還元	4. 今後の展望と発展性	5. 総合評価
平均	4.33	4.33	4	4.66	4.33
	5点×1名 4点×2名	5点×2名 3点×1名	5点×1名 4点×1名 3点×1名	5点×2名 4点×1名	5点×2名 3点×1名

評点の理由、コメント

1. 研究計画の創造性・妥当性	平均4. 33点
<ul style="list-style-type: none"> ・他にない新規性の高さ ・TMIG-LISAは、国内外で評価されている日本における極めて独自性の高い大規模な長期縦断研究である。現在は、これまでの研究を基にした第三期であり、1991年の小金井調査以来の蓄積されたデータにより極めて貴重な新規性のある成果が得られるに至っている。研究開始以来、妥当かつ手堅い研究計画と実施手法により研究が継続されている。費用対効果に関しては、その結果の如何に掛かっているといえよう。社会科学系全体と本チームの研究とが有機的に連動して成果があげられることが今後一層期待される。 	
2. 研究成果	平均4. 33点
<ul style="list-style-type: none"> ・長期追跡研究による死亡予測因子が抽出された。継続的に公表してきた。 ・TMIG-LISAにおいては、様々な研究成果が期待できるが、今回の報告では、低栄養、低体力に加えβ2-マイクログロブリンが虚弱に関連していることが明らかにされ、がん以外の死亡のリスクとなることが明らかにされたことは大きな成果といえる。 	
3. 研究成果の還元	平均4点
<ul style="list-style-type: none"> ・社会的関心と、成果の広がりが期待できる。 ・TMIG-LISAでは、これまで様々な媒体を通して成果の社会的還元が行われてきている。極めて貴重なデータであるので、今後も一層、行政、地域、産業等への施策や提言などに成果を活用することが期待される。 	
4. 今後の展望と発展性	平均4. 66点
<ul style="list-style-type: none"> ・コポート研究の区切りとのことだが継続してほしい。 ・現在、20年間のデータが蓄積されている。貴重なフィールドであり、可能ならさらに縦断的研究を継続することが望まれる。同時に、多様な調査項目の縦断的データを可能な限りにおいて余すところ無く有効に分析し尽くす責任もあると考えられる。その意味で研究継続の必要性は高く発展させることが望まれる。 	

●長期プロジェクト「中年からの老化予防総合的長期追跡研究」

5. 総合評価

平均4.33点

・素晴らしい実績、成果が得られている。

・TMIG-LISAは、国内外からも評価し得る日本における貴重な学際的長期縦断研究であり、20年間の蓄積に基づく研究成果が得られる時期となっている。今回の報告の、がん以外の老化に伴う疾病リスクに対して、虚弱、低栄養、低体力、高β2-マイクログロブリンが影響するというモデルの提示にみられるように、老化予防に対する貴重かつ確実な知見が得られている。この領域では、今後は、低栄養、低体力、高β2-マイクログロブリンの相互関連、影響要因の解明、リスク低減のための介入方法の確立、虚弱の状態像の明示などを明らかにすることなどが期待されるが、さらに、社会科学系全体の研究とも連動させ、身体、心理、社会における加齢のモデル、老化や疾病・障害・虚弱の予防法の確立を目指すためのバックボーンの一つとなる研究として位置づけられることも望まれる。

6. 評価を終えて

・研究所ならではの研究、何らかの継続を期待する。

・全てのチームに関する感想と要望をここに述べる。テーマが多角的で良いが、様々なテーマについて、各チーム、そして社会科学系として統合された視点からの枠組み、展望、各研究の位置づけなどの明確化が必要ではなかろうか。限られた時間での報告会であったためと思われるが、研究チーム内の相互の関連性、連携の方針、重複の整理などがやや不十分な印象を受けた。今後は、社会科学系としての各チーム、さらに各テーマの鳥瞰的枠組みが明示され、全体としての目的と各チーム、各テーマの研究との関連と統合が必要ではないであろうか。また、全ての研究チームに共通する要望であるが、他の大学や研究機関などでは実施しにくい、本センターならではの特性を活かした研究を、今後も一層意識して進めて頂きたい。たとえば、TMIG-LISAなどが好例であろうが、その独自性と意義を成果と共に社会的にアピールすることも望まれる。研究成果の公表に関しては、先ず、ピア・レビューを受けた学術論文として発表し、学術的に確証された結果を、都民はじめ一般向けに分かりやすく有用な形で提供するという流れが期待される。これは既に本センターで実行されていることが報告会の内容からも明らかではあるが、実証的研究を終了した後に、結果を学術論文として発表し、さらに社会に向けて提供するまでの過程を可能な限り速やかに行う必要がある。そのためには、これも本センターで既に実施していることではあるが、外部の研究者と一層積極的に連携し、本センターの専任研究者だけでは不十分な側面を補うことが求められよう。とくに、現有人員では過剰な負担となったり時間を要することが見込まれる場合には、外部機関との連携は不可欠ではなかろうか。また、社会的還元の新しい方法や内容の工夫、開発も今後、検討の余地があることと考えられる。

・社会科学系全体として

それぞれに重要なテーマであり、意義のあるものと考えているが、社会科学系全体として対外的な情報発信の弱さが目につく。これは以前の老人総合研究所時代から指摘されていたことである。途中経過でも良いので研究成果を都民にわかりやすく示してもらいたい。独法化した今この弱点を是非克服してほしい。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会設置要綱

22健事第1174号
平成22年12月24日制定

(設置目的)

第1条 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（以下「研究所」という。）が実施する研究について、厳正な評価を行い、もって、より効率的・効果的な研究活動を推進し、都民である高齢者のための健康維持や老化・老年病予防に寄与する研究体制づくりに資することを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 前条に定める研究の評価を行うこと。
- (2) 前号の研究評価を実施した後、速やかに、評価結果及びその概要をとりまとめ、必要な意見を付して、センター長及び研究推進会議に報告すること。
- (3) その他、センター長が必要と認める事項

(組 織)

第3条 委員会は、次の各号に定める委員会とし、各委員会に委員長を置き、委員長は、委員の互選により選出する。

- (1) 自然科学系研究外部評価委員会
 - (2) 社会科学系研究外部評価委員会
- 2 委員長は委員会を招集し、会議を主宰する。
- 3 委員長に事故がある時は、あらかじめ委員長が指名した委員が委員長の職務を代行する。

(構 成)

第4条 各委員会は、次の各号に掲げる評価委員（以下、「委員」という。）5名以内をもって構成し、委員はセンター長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 3名以内
 - (2) 一般都民を代表する有識者又は老年学に造詣が深い者 1名以内
 - (3) 行政関係者 1名以内
- 2 各委員会は、それぞれの委員の過半数の出席により成立する。
- 3 委員長は、必要と認めるときは関係者に委員会への出席を求めることができる。
- 4 委員長は、必要と認めるときに部会を設けることができる。部会長は委員の中から委員長が指名するものとする。

(評価項目及び評価視点)

第5条 評価項目及び評価視点はおおむね次のとおりとする。

- (1) 研究計画の独創性・妥当性（研究内容の独創性・新規性・必要性、病院や他チームとの連携など総合力）
- (2) 研究成果（目標の達成度、学術的な知見、成果の発表）
- (3) 研究成果の還元（行政施策・地域・産業への反映、提言、審議会への参画）
- (4) 今後の展開と発展性（中期計画達成に向けた研究の方向性や内容、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性）

(公開)

第6条 委員会及び委員会に係る資料、要点記録（以下「資料等」という。）は公開する。

ただし、委員長あるいは委員の発議により、出席委員の過半数で決議したときは、委員会又は資料等を公開しないことができる。

2 委員会及び資料等を公開するときは、委員長は、必要な条件を付することができる。

(評価結果の公表及び開示)

第7条 センター長は、評価結果の概要を公表する。

2 センター長は、研究チームの代表者から求めがあった場合、研究チームの代表者に、当該研究チームの行う研究に係る評価結果を開示することができる。ただし、委員会で決議のあった事項については、開示しないことができる。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、経営企画局事業推進課において処理する。

(雑則)

第9条 この要綱に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は理事長が定める。また、委員会の運営に必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成22年12月24日から施行する。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会実施要領

22健事第1174号

平成22年12月24日制定

(目的)

第1 この要領は、東京都健康長寿医療センター研究所（以下、「研究所」という。）外部評価委員会設置要綱の規定に基づき、研究の外部評価の実施について必要な事項を定めることを目的とする。

(評価の対象)

第2 研究評価は、研究所で行われるチーム研究・受託・共同研究等による研究を対象とする。

(評価の実施)

第3 研究評価は、原則として、毎年度実施するものとする。

(評価委員及び評価の方法)

第4 研究評価は、次の方法により行う。

- 2 評価は、外部評価委員会の委員により、研究報告書等により行う。
- 3 評価の実施にあたり、外部評価委員会は研究に関するプレゼンテーションを研究部長等に行わせることができる。
- 4 当分の間は、研究進行管理報告会も併せて行うこととし、理事長、センター長、経営企画局長、副所長等を参画させることができる。

(評価基準)

第5 研究評価の評価基準は、評価項目ごとに別に定める。

(評価結果の活用)

第6 センター長は、研究評価の結果を主に次により活用する。

- (1) 研究チーム・テーマの再編
- (2) 研究目的、研究計画、研究体制などの設定
- (3) 研究資源の配分
- (4) 研究所のビジョンや重点研究、プロジェクト研究の再構築

(雑則)

第7 この要領に定めるもののほか、外部評価の実施に必要な事項は、研究推進会議の議を経て、センター長が定める。

附 則

この要領は、平成22年12月24日から施行する。